

「杉から始まった伊勢志摩海女小屋物語」

— もう一度あなたに会いたくて —

三重外湾漁業協同組合（越賀）

西岡 つきよ

1. 地域の概要

志摩市は、平成 16 年 10 月 1 日、志摩郡 5 町が合併によって誕生した。市の全域が伊勢志摩国立公園に含まれており、海の青、山の緑に輝く美しい町である。また、古くから豊かな海の幸を都に献上する「御食つ国（みけつくに）」として知られており、海、山の資源を生かした水産業や農業、観光業が営まれている。（写真 1）

志摩市志摩町にある越賀地区は、前島（さきしま）半島に位置する 725 世帯・1,850 名の大変小さな漁村である。

2. 漁業の概要

越賀地区の組合員数は 30 名で、主な漁業は「海女漁業」である。貝類ではアワビ・サザエ等を漁獲し、藻類ではヒジキ・テングサ・アラメを採っている。昨年度の漁獲量は約 39t、水揚げ金額は約 4,100 万円であった。

3. 研究グループの組織と運営

越賀地区の海女漁業者は、昭和 24 年には 166 名もいたが、現在では 32 名となり大幅に減少している。

海女漁業者が組織する「海女同盟会」の活動は、アワビ稚貝の放流、海浜清掃、地域行事への参加などを行っている。（写真 2）

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

海女の減少に危機感を感じた海女同盟会有志 4 名と引退した海女 7 名は、「海女文化を伝えたい、越賀地区の活性化に協力したい」との思いから、志摩市観光協会と連携しながら「海女小屋体験」活動を行うこととなった。この活動は、旧志摩町と友好都市にある岐阜県郡上市白鳥町の特産物である「杉」を有効利用した“地域おこし”から始まった。

この「杉」を利用した体験施設の第 1 号は平成 16 年 9 月に、第 2 号は平成 18 年 9 月に完成した。（写真 3）

当初、私達には「都会の人と話すのは苦手」とか「満足してもらえるのか」といった大きな不安があったが、活動を始めて徐々にその不安は掻き消された。

5. 研究・実践活動状況および成果

(1) 海女の生活

海女の年間スケジュールは、春にヒジキ、テングサ、アラメを採り、春から秋にかけてアワビやサザエを漁獲し、冬にはナマコを漁獲する。年間操業日数は100日程度である。操業は午前と午後に1回ずつで、1日のうち海女が潜る時間は最大で3時間にもなる。潜る水深10メートル前後の水温は冷たく、たとえ真夏でも収縮した血管を戻すために少なくとも1時間半は火を焚いて暖を取らなければならない。夏の漁期が終わると5~10キロも体重が激減するほどの“過酷な漁”である。また、水圧による鼓膜の損傷や操業中の失神など“大変危険な漁”でもある。

越賀地区の海女の生活スタイルは、この地域では盛んに行われている志摩特産の単人芋を煮て天日で干す「きんこ作り」等との半農半漁の生活が一般的である。(写真4) きんこは、6月に芋の苗を植え10月に収穫することになるが、この間は大変忙しい毎日を送る。早朝、漁に出る前に田畑の世話をし、朝食を作って家族の世話をしてから漁に出て、家に帰って来てまた畑仕事、その後に夕食の準備が待っている。

海女の生活は、漁業だけでなく、農業、家事、介護など多岐にわたり、多忙な毎日を送っている。

(2) 本当の海女小屋

実際の「海女小屋」の多くは、トタン張りや板張りの粗末な小屋である。小屋の広さは四畳半ほどの大きさで、床には古くなった畳が敷かれている。小屋の中央部には約1m四方の火を焚く囲炉裏があり、それを囲むように海女が座って、暖を取る。

私達にとって、漁を終えた後の「海女小屋」でのだんらんのひと時ほど、楽しく、くつろげる時間はない。それぞれが持ち寄りのお菓子でお腹を満たしながら、子どもの自慢話や亭主の悪口に笑い声が絶えない。この「海女小屋」は、単に仕事の疲れをいやす場だけではない。たったひとつの不注意が命を落とす素潜り漁であるが故に、「仲間の無事を確認しあい、皆が明日への力を得ていく場」でもある。

私達が「海女小屋体験」で伝えたいのは、そうした海女小屋の“空気”である。

(3) 海女小屋体験

体験施設は、実際の海女小屋をできるだけ再現するため、私達が大切に使っていた漁具をひとつひとつ持ち寄り、飾り付けを行った。

私達は地元で獲れた旬の魚介類の炭火焼きや、郷土料理の「てこね寿司」を振る舞って精一杯もてなす。また、アワビ・サザエなどの生態や海女の歴史・風習・祭りなどを大きな笑声で語っている。(写真5)

私達が心がけていることは、ありのままの“海女の姿”を見せることである。とりわけ、海女の“視線”でしか知り得ないことを語るようにしている。「体験者」からは、海女ならではの話を聞きたいとの思いがひしひしと伝わってくる。例えば、どうやってアワビを獲るの？、潜る深さはどれくらい？、これまで危険な目にあったことは何？などの質問攻めに遭うこともしばしばである。これまで海女として歩んできた“生き様”を聞きたいのである。

(4) 海女小屋体験者の増加

平成 17 年度には約 150 名程度しかいなかった「体験者」は年々増え続け、平成 20 年度には 2,000 名を超えるまでになった(図 1)。「体験者」の多くは、10 名以上の団体客や若いカップルであるが、リピーター率が非常に高い。これは、最初は団体客として来た「体験者」が、体験の内容を気に入り、次は家族連れで来たりするからである。体験者の中には、「〇〇さんに会いたい」と、海女さんを指名する嬉しい固定客もいる。これは、「体験者」が求めることと私達が提供することがマッチしていることの証拠であると確信している。

(5) 海女小屋体験者の拡がり

「体験者」の参加は、県内はもちろん、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府といった近隣府県からも多くの方が訪れる。現在では「海女文化に触れたい!」との想いで中国・アメリカ・フランスといった海外から訪れる方が増えている。以前に取材を受けたフランスメディアによると、「野生的な伝統漁を受け継ぐ女性たち」は大変興味を引くようである。世界を見渡しても日本と韓国にしかない海女は、大変希有な存在であると実感している。

(6) 海女小屋体験者の“増加”と“拡がり”の背景

「体験者」の“増加”と“拡がり”には、ホームページによる情報発信が大きな要因となっている。平成 19 年 2 月のホームページ開設以降、「体験者」は大幅に増加している。この「海女小屋体験」で本物の海女に出会い、貴重な海女文化に触れることが出来るまたとない機会と感じ取っているようだ。こうして、体験者の方々に海女文化に触れてもらい、伝統を知ってもらうという役割を担わせてもらっていることが実感でき、私達海女に“人を惹きつける力=観光力”があると自負している。

6. 波及効果

(1) 観光宿泊施設との連携

志摩市内には宿泊施設が多く、海の幸を堪能することを望む観光客が多い。観光客から「志摩ならではの体験がしたい」とのリクエストを受けて、この「海女小屋体験」を勧めてくれる宿泊施設も近年増えている。今後、観光宿泊施設との連携をより深め、より多くの観光客に「海女小屋体験」をぜひ味わって欲しいと思っている。

(2) 家計の改善

近年は、磯根資源の減少と長引く不況の影響により魚価安の状況が続いている。このため、海女漁による年間水揚げ金額は一人あたり約 150 万円程度しかない。また、若い人でも働く場がない時代にあって、70 歳を超えたおばあちゃんを雇うほど余裕のある会社はどこにもない。こうしたなか、「海女小屋体験」で周年活動することにより、漁業と観光業に有機的に取り組むことで、新たな安定した収入を得るというスタイルを確立することができた。今後も海女漁だけで生計を維持することは難しいため、海女漁と海女小屋体験活動を両立させながら海女漁家の経営改善を図っていきたい。

(3) 私たち海女自身が変わった・・・

「体験者」との対話を通して私達にも良い変化がみられた。様々な地域や年代の“仲間”と同じ海女小屋の下で語りあうという新たな楽しみが生まれ、お互いがとても元気に生き生きとした気持ちになり、明日への力を得ている。

また、対話のなかで“海女の生き様”を「体験者」自身の人生と重ねあわせて涙を流す方もいる。無我夢中で海女として働き、時には磯メガネのなかに大きな涙を溜ながらも生き抜いてきたことを伝えると、深く感動し「元気をもらったよ」とのお礼の言葉を述べてくれる。こうした声を直接聞くことができるのは、私達にとって大変嬉しく、海女で良かったと思う瞬間である。海女であることは、私達にとって“誇り”である。

7. 今後の課題や計画と問題点

(1) 海女漁業者の高齢化

平成22年度に海の博物館が実施した「海女存在数調査」で鳥羽志摩地域の海女がついに1,000人を切ったことが明らかになった。しかも、現役海女の平均年齢は60歳を越えており、高齢化が進んでいる。一般的に、77、78歳で引退する海女が多く、これから5年後には非常に厳しい状況がくることが予想される。そうなれば今後、海女の後継者や海女文化の衰退が非常に深刻な問題となる。このため、この海女小屋体験を、海女への就業を考える新たな担い手確保や生きた情報発信の活動場として、また、新規海女漁業者にとっては副収入が得られる活動場としての機能を高めていく必要がある。

(2) アワビ等の磯根資源の減少

近年、海の中の変化は大変著しい。10年前と比べるとアワビやサザエ等の磯根資源は約1/3にまで減少していると感じる。これ以上の磯根資源の減少を防ぐため、ウニやヒトデの駆除を引き続き積極的に行い、餌となる海藻や磯根資源を守っていききたい。また、海が物語っていることを、幅広い機会を捉えて多くの人に知ってもらいたいと思っている。

(3) 海女小屋体験への思い

「体験者」のなかには、「あなたにもう一度会いたくて・・・」と再び来る方も多い。私達も再び「おもてなし」ができるように海女漁業を守り、海女文化を発信し、「仲間の無事を確認しあい、皆が明日への力を得ていく場」としての海女小屋体験に積極的に活動していききたい。

最後に、この海女小屋体験は「杉」から始まった。「杉」の名の由来は、“まっすぐの木＝直木”であり、古来より身体を暖める薪としても重宝されてきた。私たちも「杉」のように、海女としての誇りを胸に真っ直ぐに生き、人の心を暖めることができる存在であり続けたい。(写真6)

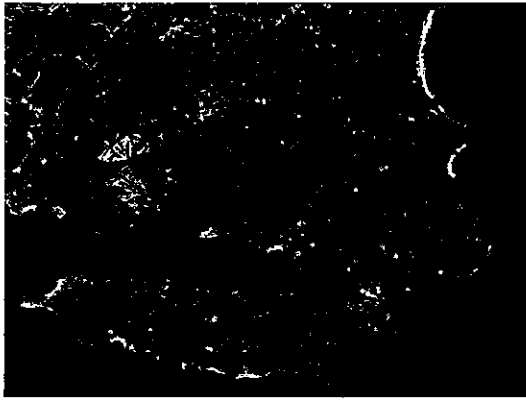


写真1 志摩市全景



写真2 海浜清掃



写真3 海女小屋体験施設



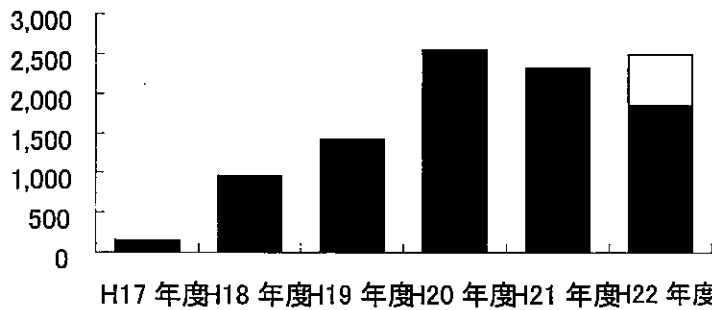
写真4 志摩地方の郷土食「きんこ」



写真5 海女小屋体験風景



写真6 海女小屋体験の海女



H17年度H18年度H19年度H20年度H21年度H22年度

図1 年度別海女小屋体験者数
※白色棒グラフ：見込体験者数

所在地（三重外湾漁業協同組合越賀地区）

